懇親会スピーチ

卒寿の振り返り

西田 俊夫
昭和 25 年 3 月学部卒業

私は今年（2017 年、平成 29 年）7 月に 90 歳になった。すでに数回卒寿の祝いをして頂いている。これほど長生きするとは思わなかった。私が子供の頃は人生 50 年といわれ、織田信長の時代とあまり変わっていない。また旧制高校までの学生時代は第 2 次世界大戦中であり、人生 25 年といわれた。それが戦後の平和な時代を迎え、経済と医学の進歩により人生百年も目前に迫っている。まさに驚きを禁じえない。

私が京都大学理学部数学科に入学したのは戦後間もなくの昭和 22 年であり、旧制では 3 年間の大学生活をハイパーインフレのさなかに何とかくぐりぬけ、昭和 25 年 (1950 年）に無事卒業した。

卒業のとき三木良一君と私の二人に大学院の特別研究生の推薦を頂いたが、私は新設の神戸大学理学部の数学科の助手（今の助教）に採用の内定があったので辞退して、普通の大学院生として籍を置き研究させて頂くことになった。神戸大の数学科は新設であるから学生は最初の 2 年間は教養部に属し、その間はほとんどすることがないので助手も自由に研究しておればよいとのことで非常に有難かった。京大での私の指導教授は松本敏三先生であり、先生は当時数学教室の最長老で定年をまじかに控え、私が最後の弟子であったと思われる。先生はその頃統計学に関心をもたれ、京都工繊大の木津氏と私と二人での Wilks の数理統計学のゼミを指導して下さった。神戸大では統計数理研究所から来られた坂元平八教授の下で品質管理の研究をすることになっていたので、このゼミは非常に役立った。松本先生は茶目っ気もあり 1950 年の American Journal of Mathematics の Halmos と Vaughan の論文 “Marriage problem” を君は独身だから読んでみたまえといわれて、読んだこともある。京大では小堀 憲 先生のワイルのリーマン面の研究について三木君がおこなっていたゼミにも参加させていただいた。

松本 敏三 教授

神戸大学では 2 年目に内地留学として名古屋大学理学部の数学教室におられた伊藤清 助教授（今の准教授）の下で研究することになった。坂元教授からの統計学研究の

基礎として確率論をしっかり勉強せよとの指示による。当時の名古屋の数学教室は木造のお粗末な建物であったが、教授陣容は日本で最高水準であったと思う。伊藤先生の講座の教授は吉田耕作先生であり、副手（実験助手にあたる）として白尾恒吉氏がいて、私は白尾氏と共同研究することになった。また学部3回生の飛田武幸君がこの研究室におられた。卒業年度が私と同じである永田雅宜氏と伊藤先生の弟さんの伊藤清三氏はともに助手であった。永田氏は後に京大教授に、清三氏は東大教授になられたが、ともに故人である。伊藤先生のご指導よろしきをえて、1年後には数篇の論文が完成し、欧文誌に載せることができた。

伊藤 清 教授（1961年）

神戸大学の教育学部に当時阪大から来られた清水辰次郎先生がおられた。先生は有理型関数論での 清水-Ahlfors の定理で高名であった。先生はいち早く国際的な欧文誌マセマチカ-ヤポニカ （Mathematica Japonicae）を刊行されていた。これは日本数学会の欧文ジャーナルよりも早くから刊行された。それの印刷、校正などを阪大数学出身の井関清志氏と私でお手伝いすることになった。井関さんはプーゲンビル島のラバウルでの激戦に生き残り、オーストラリアでの戦犯の服役を経て復員され、神戸大学で私とともに助手をされていた。ヤポニカのお手伝いの仕事はその後、清水先生の助教授でこられた笠原章郎氏がひきつがれた。笠原氏は京大数学の笠原晧司さんの兄さんである。清水先生はまた日本数学会の応用数学分科会を主宰しておられ、先生に依頼されて私は特別講演 “ゲームの理論” と “線形計画法 ” を2年にわたってさせていただいた。

当時は欧米の著書が極めて高価であり、一方ロシアではそれらをすべて翻訳し、紙質は悪いが廉価で売られていた。そこで十人ばかりの有志で神戸外大のロシア語の先生に依頼してロシア語を勉強した。数年続いたと思う。その結果として練習のつもりで井関さんと共同で何冊かのロシア語の本の翻訳を試み出版した。みすず書房のヤグロム兄弟の情報理論は今でも少し役立っている。

神戸大学では経済経営研究所の数理経済学のゼミにも参加させて頂いた。また1955年に阪大経済学部の教授を中心とした経営科学協会が設立され、私も当初から会員であった。これらの刺戟と戦後の復興の経営面での必要性とから、私の研究面での関心が確率論から自然にOR（オペレーションズ・リサーチ）へと移っていった。日本OR学会が1957年に設立されたが、これの母胎が経営科学協会である。学会誌の経営科学もそのままひきつがれた。

神戸大学時代に待ち行列理論の研究を始めていたが、その実際例への応用として国営事業からの依頼があり、神戸港湾局の新しい突堤の大きさの決定と、国鉄の計画中の新幹線の吹田操車場の引き込み線の本数の決定を現場の技術者とともに解決した。名

古屋大学で指導して頂いた伊藤先生はその後、京大教授に栄転され、数年先輩の溝畑茂氏と山口昌也氏とともにポール・レヴィの確率過程とブラウン運動の本をテキストとして私が読むことになった。

神戸大学には助手で2年半、講師で6年半の合計9年間勤め、1959年に甲南大学理学部に新設された経営理学科へ助教授として転任した。当時の甲南大学学長は私どもが京大で物理学総論の講義を受けた荒勝文策先生であった。先生は大学設立からずっと運営を続けてこられた。

甲南大学にはそのとき日本で初めてIBMのコンピューター650が慶応大学とともにはいった。私の月給が3万円であったときにこのコンピューターは1億円であった。しかしその性能は現在の5, 6千円のプログラム電卓の機能より劣っている。それでも当時は私どもは計算にタイガー計算機を手動で回していたのでやはりコンピューターといえたと思う。このコンピューターは真空管でできており、スイッチを入れても温まるまで半時間ほど待たねばならなかった。またプログラムは機械語で書かねばならず、それを覚えるのに数か月かかった。ところが1年ほどしてコボールとかフォートランのような汎用語ができて、機械語は不要になった。全く無駄なことをしたものである。

甲南大学でも新設学科であったため、最初の2年間はかなり余裕があり2年目に半年ほどアメリカのロチェスター大学に留学することになった。まだ留学の珍しい時代で、出発時には大阪駅まで学長をはじめ多くの教職員が見送りに来て下さった。

ロチェスターはニューヨーク州の北部のオンタリオ湖に面した美しい町で、シラキュースとバッファローの中間にあり、ナイアガラの瀑布までも遠くない。ロチェスターはイーストマン・コダックのカメラの会社を中心とした街で、ニューヨーク州第二の都市である。ロチェスター大学は経済学と物理学の光学が優れているとされており、私は経済学部で研究することになった。私の滞在したのは9か月ほどであるが、その大半は雪にとざされていた。ここでの経済学の勉強は後の経営科学の研究に役立っている。

京都大学には本職として勤務したことはないが、非常勤講師としては方々へ出講した。教養部の数理統計学の講義はかなり長期にわたり7, 8年続いたと思う。その他、経済学部で青山先生に頼まれて統計学の講義を法経大教室で行い、また工学部の数理工学科の設立の当初にORの講義を行った。さらに大阪市大理学部、大阪府大工学部、阪大理学部へも短期であるが非常勤講師として出講した。

甲南大学には助教授として4年間、教授としても4年間の合計8年間勤めた。経営学部も兼務した。講義は経営数学、統計学などであった。ここのゼミの学生は私の自宅へもよく遊びに来て親密になるものが多かった。昭和38年卒のゼミ生は今でも年に1回コンパをやり、私も出席している。私の助手であった早良明太君は京都河原町の鴨川沿いの料亭“ちもと”へ養子に行き松井と改姓したが、その後女将さんがなくなり大学を退職し店主として経営している。私もときどき利用させて頂いている。1967年2月に大阪大学工学部に新設された共通講座の応用推計学講座の教授として転任した。甲南大学学長の荒勝先生の許可がなかなか出なかったので就任がかなり予定よりも遅れた。阪大には定年の1年前まで23年間勤務した。

上記の講座は共通講座であるが、応用物理学科に所属していた。勤務年限が長かったので助教授は3代目まで交代し、定員二人の助手も6, 7人に及んだ。研究室には大学院の博士課程の学生が数人、修士課程の学生は5, 6人、学部学生は4, 5人いたので、秘書も含めてかなりの人数であった。このころから本格的に学会活動を始め、春と秋のOR学会では多い時には10篇近くの発表をした。ORの適塾と呼ばれたこともある。阪大工学部で日本数学会の春季大会を開催してほしいと依頼された。頼みに来られたのは数学会の理事長で旧制高校の私の1年後輩である藤田宏東大教授であったが、開催時の理事長は木村俊房東大教授であった。私は日本OR学会を甲南大学で1回、阪大で2回主催したことがあるので学会の準備には慣れていたが、数学会はこれよりはるかに規模が大きく実行には手間どったが、研究室全員が協力してくれて何とか実現できた。懇親会には広中氏も参加され、また小堀先生には挨拶の言葉を頂いた。

ここで社会的活動に少しふれておこう。関西生産性本部に少し前からOR協会、IE協会、コンピューター研究会などができていたが、1969年にそれらを統合して関西経営科学協会が設立された。それが1982年に時代の変化に対応して関西経営システム協会と改名した。この会の会長は住友金属社長の乾さんと新宮さんが続いて、副会長にヤンマーの山岡さんと私が就任した。この副会長は私が大阪国際大学を退職する直前まで続いた。1984年にこの会が“訪米視察団”を編成し、山岡さんが団長で私が副団長となり、アメリカ各地の大学の研究所、企業を巡回し、新しい情報技術を修得した。科学的経営を目的とする民間団体として日本科学技術連盟があり、そこではQC，ORなどの啓蒙普及活動を行い、私もセミナーの講師として参画していた。また大阪の電気クラブにある事務所では定例的にOR研究会を行い、阪大の私の研究室の諸君も大勢参加し、熱心に勉強していた。一方、通産省の外郭団体である日本規格協会では、工業規格JISの制定と同時に、QCの教育にも力を入れてQCの定期講座をもち、私はその教務主任を務めた。阪大工学部の同窓会の阪大工業会では1976年に夏季数学講座を開催することになり、私が世話役で理学部の中岡教授、基礎工の竹之内教授の応援をお願いした。この二人の先生は10年近く続けられたが、その後何人かの先生に次々と代わり、現在は阪大名誉教授の難波誠氏と京大数学出身の長井英生氏にお願いしている。今年で第42回をすませた。よく続いたものだと思う。私もどこまでやれるかわからないが、聴講生はほとんど固定しており、なかなかやめることに賛成してもらえない。

阪大の定年の1年前に新設の大阪国際大学に移動した。この大学は宝塚から北の新地を経て京田辺から木津へ向かうJR学研都市線の長尾駅から少し歩いたところにある。郊外の静かな環境である。学部は経営情報学部と法政経学部の二つだけである。留学生別科に力を入れている。大学の近所には千字文を伝えた王仁（わに）の墓のある公園がある。枚方市の中心部にある百済（くだら）神社は真物であるが、王仁の墓は大阪府にいくつかあり、どれが真物か定かでない。

大阪国際大学で私は国際関係研究所長、経営情報学部長、同研究科長、それから学長と次々に管理職を経てきたので、あまり研究する時間はなかった。学生は最初の数年間は質が良く一流企業に推薦できた。残念なのは私を招いて下さった理事長の奥田省吾氏が私が赴任した数年後にわずか50歳で急逝されたことである。ご子息の吾朗氏

が理事長を引き継がれた。開学10周年には吾朗氏と私で記念植樹をした。

2003年に大阪国際大学を75歳で退職した。神戸大学から数えて53年勤めたことになる。我ながらよく続いたと思う。退職する直前から知人が経営するベンチャービジネスNBL研究所に監査役として参画していた。退職後は会長となった。ここはFRPという鉄より強い強化プラスチックの種々のタイプを研究生産し、中国の油田採掘用に用いていた。それで工場が無錫にあり、私も何回も行った。

無錫の工場長の黄さんは研究にも熱心で度々来日され、私の勤務していた大阪国際大学で第1号の論文博士をとられた。彼は習近平総書記の幼馴染とのことで将来が期待されたが数年後に急逝した。そこで会社も中国よりもインドとかアラビヤの方に力を入れるようになった。私は今、相談役の名前だけで実際の活動をしていない。

退職後に地域に新しく生まれた男声コーラスに参加して現在にいたっている。来年が15周年の記念の発表会の予定である。このコーラスの何人かと共に、地域の老人介護施設へコーラス指導という一種のリハビリにボランチアで月に数回いっている。施設入居者またはデイサービスの老人はほとんど私より若い。介護を受けるよりも慰問に行ける方がよいとしみじみ思う。

現在は政治も気候も極めて変動に富んで不安定な時代である。数年後の予測すら困難である。残り少ない人生をどのようにすれば社会に役立つかを考えるのもむつかしい。失われない5年を目指して頑張ろう。

最後に、老人の定義について一言述べさせていただく。現在老人とは65歳以上となっているようであるが、これは平均寿命が60歳くらいの時に決められたように思う。現在では平均寿命は男性でも80歳になっており、したがって老人は85歳以上とすべきであろうと思う。平均より低いのに後期高齢者というのもおかしい話である。85歳以上にすれば老人が多すぎるとはいえないであろう。また会社の定年延長とか年金支給年齢の引き上げなどにも役立つ。ついでに古希の名称も70歳では、多すぎて稀とはいえない。100歳くらいにすべきであろう。もちろん、喜寿とか米寿のような字による年齢はそのままでよい。老人が老人の定義を云々するのは自己矛盾で余計なことであろうが、社会のために一考をお願いしたい。